

Next125と図書館諸施策の具体化に向けて

守田 芳秋（事務部長）

WASEDA NEXT 125 ―図書館の戦略的課題―として答申書を提出することができた。内容は既に公表されており、答申書の主要な柱についても加藤館長が本号でまとめられている。ここでは、この答申書に示された図書館諸施策をどう具体化していくかが重要となってくるので、取り組むべき重点課題の整理をしておきたい。

まず、図書館組織が今後、どうあるべきかを考えていく必要がある。これまでの管理的業務中心の組織特性から脱却し、図書館が主体となって教育研究支援の推進役を担うためにはどのようにしたらよいのか、現有の要員や組織力を最大限に活かすための組織はどのようにあるべきか、電子媒体資料の導入経費に顕著に現れているように各学院院だけでは分担しきれない予算執行状況をより適切な形で運用していくための体制作りとは、この間に進めてきた戦略的なアウトソーシングの整備・拡充と専任職員の職務（役割）との明確化、等々の多面的な視点からの検討を加え、期待される図書館の新たな役割に対し、柔軟に対応できる機動性を持った図書館組織となるよう見直しを進めていかなければならない。その具体策の一つとして、本答申で掲げた「リエゾンオフィス」を早急に立ち上げ、同オフィスでの活動を通して、先進的な図書館施策の提言を行うなど図書館におけるシンクタンク的な機能を担う組織へと成長・発展させていくことは重要な課題である。

この他、学術情報リテラシーや教員との協働による学術情報資源の活用などへの取り組みについても、図書館組織としての関わり方を明確かつ具体的に示していく必要がある。

次に、組織の見直しとも密接に関連してくるが、次代の図書館職員の養成をどのように進めていくかが大きな課題である。図書館職員の中核的職務（専門性）に関する検討は継続的に行ってきたが、環境変化への対応に追われ、将来を見据えた要員施策を推進できなかった。本答申では、本学の職員総合人事制度において検討がなされてきた専門

職制度の先駆けとして、「リエゾンライブラリアン」制度を試行的に導入することを提唱した。主題や地域・言語等による専門性に加えて、各学院院や教員と連携しながら教育研究支援の推進役を担うなど、やや広めの守備範囲と多様な利用者サービスを担える「リエゾンライブラリアン」を専門職と位置づけた。今後、担当業務の枠組みや処遇などの諸課題を整備・調整していかなければならないが、図書館職員が目指すべき将来像の一つとして、専門職制度を設けることにより、個人としてのやる気を高め、組織の活性化にも結びつけていきたいと考えている。

要員確保・人材育成などにあっては、図書館職員（専任職員）が担うべき職務・役割の明確化と提供すべきサービスについて、図書館自身が発信していくことを強く求められている。今回の新たな専門職制度の導入を契機に、図書館職員の職務・役割分析を改めて行い、図書館職員に求められる将来像や職務等に関する提言をまとめ、人材育成を含む要員施策を実現していくことも重要な取り組みの一つである。

また、図書館を取り巻く環境変化が激しいなか、これまでの館・課単位や縦割り型の業務・役割分担だけでは、現図書館職員（専任職員）の能力を十分に活かしきっておらず、様々な業務変革への対応といった点からも、業務遂行に関する見直しを早急に進めていく必要がある。非来館型サービス等の新規業務だけに限らず、継承すべき基盤的な業務（この見極めも重要であるが）にも、所属や係を超えた横断的な業務遂行体制を導入するなどの機能強化と効率化を図り、これらを通じたスキルアップに取り組んでいかなければならない。

終わりに、今回のNEXT 125を大きなチャンスとして捉え、利用者の多様なニーズに可能な限り応え得るための図書館サービスを実現していくには、図書館職員一人ひとりが「変革力」を持って、主体的に新たな取り組みへ挑戦していくことが最も重要な課題である。